

民主主義の危機と 日本の安全保障



櫻井 よしこ
(国家基本問題研究所理事長)

令和四(二〇二二)年は日本にとって安倍晋三元首相が暗殺された惨劇の年だった。世界にとってはベルリンの壁が崩壊し東の間国際社会に広がった雪解けの時代が終わり、またもや自由・民主主義体制と専制独裁・権威主義体制の勢力圏に顕著に二分された年だった。

プーチン大統領によるウクライナ侵略戦争、或いはそれ以前に中国武漢由来の新型コロナウイルスによって、国際社会は民主主義陣営と権威主義陣営が鋭く対立する場に引き戻された。

このような世界の展望を見通そうとするとき、ハルフォート・マツキンダー以降、ニコラス・スパイクマン、ズビグネフ・ブレジンスキーらが唱えた長期的展望としての地政学の視点が説得力を増す。地球上最大のユーラシア大陸中央部を制圧する勢力が国際社会の覇権を握るといふ考え方だ。

覇権を握る勢力を中国に重ねて見なければならぬ局面に私たちはある。アメリカはアメリカ一極体制の崩壊であるこの事態に如何に対処し得るのか。世界の人々を魅了し続けるアメリカ本来の自由な発想と民主主義、誰にでも機会が与えられる公正かつ公平な国家をアメリカは維持できるのか。強い経済力と軍事力に支えられる闊達な民主主義の力を維持できかねるのかが問われている。

台頭した中国では、習近平国家主席がアメリカと共に世界を二分し、さらにアメリカを凌駕する野望を隠さない。習氏は第二十回共産党大会において常務委員会及び中央軍事委員会を自らの側近で固め、異論を許さない独裁的体制を築いた。第二の毛沢東、或いは毛沢東をも凌駕する強権体制が確立されたと言つてよいだろう。

習氏は「中国のイデオロギーと社会制度は基本的に西側社会のそれとは相容れない」とし、西側陣営との闘いは和解不可能で、長く、複雑な争いとなるとの見通しと共に、社会主義体制は自由主義体制を凌駕し勝利できるとも、内部向け演説で語っている。

このような中国の挑戦に直面するいま、自由主義を掲げる国々が解かなければならない課題は重く複雑である。わが国はロシアに侵略されたウクライナの实相から、国を守るといふことの現実を学びつつある。政府は日本国の国防の基本となる新たな戦略を定めた。戦後の受け身の国防政策から脱却する兆しを見せたのは前進である。それでも戦後日本を呪縛し続けてきた現行憲法の根本的欠陥は改められていない。国民と国土は自力で守るといふ国家としての当然の責務を果たす方向に更に歩を進めることが急がれる。

国基研の紀要第三号は、こうした難題に挑むための問題提起である。